

茨城大学学報

第352号

令和2年8月～令和2年9月



茨城大学発ベンチャー称号を授与

INDEX

- ◆ 青山文部科学大臣政務官を表敬訪問
- ◆ 令和2年度茨城大学名誉教授称号授与式を実施
- ◆ 陸上競技部、3年ぶりに箱根駅伝予選会出場決定
- ◆ 水戸ヤクルト販売(株)と連携したリカレント教育プログラム開講
- ◆ 茨城県議会と相互連携・協力に関する包括協定を締結
- ◆ 株式会社 Dinow に茨城大学発ベンチャーの称号を授与
- ◆ 後学期授業初日！水戸キャンパスの1日を追う

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 青山文部科学大臣政務官を表敬訪問

太田寛行学長、山岸仁理事・事務局長、増澤徹工学部長が、8月25日、青山周平文部科学大臣政務官を表敬訪問し、本学の最新の取り組みなどを説明しました。なお、今回の訪問には、地元茨城県選出の石川昭政衆議院議員も同席しました。

本学からは、ディプロマ・ポリシー主導の教育改革による独自の質保証システムや、工学部のキャンパスがある日立市及び日立製作所と共同した安全、安心な地域づくりのプロジェクト、本学・宇都宮大・群馬大と連携したデジタル教材データベース構築の構想などを説明するとともに、国への要望などを伝えました。青山政務官もそれぞれの取り組みの具体的なシステムやコロナ禍における大学の近況等について質問するとともに、地方国立大学の重要性、学生に選ばれる魅力ある大学づくりへの期待などについて言及し、終始和やかな雰囲気の中意見交換を行いました。



新入生のディプロマ・ポリシー理解促進を目的とした本学の
「コミットメントブック」を手に記念撮影
(左から石川議員、青山政務官、本学の太田学長、増澤工学部長、山岸理事)

◆ 令和2年度茨城大学名誉教授称号授与式を実施

8月28日、令和2年4月に名誉教授称号が授与された13名に対する茨城大学名誉教授称号授与式を水戸キャンパス図書館ライブラリーホールで開催しました。

今回の授与式は、新型コロナウイルスの影響で開催時期を遅らせて実施したものです。授与式では、出席した8名のひとりひとりに、太田寛行学長から名誉教授称号記が手渡されました。

太田学長は、4月以降の新型コロナウイルス感染症への対応などを報告し、「先生方のご尽力、BYOD（学生が学修に使用するノートPCなどのデバイスを持参することを前提とした仕組み）をはじめとするさまざまな取り組みの蓄積のおかげで、遠隔授業等を順調に進めることができている」として謝意を伝えました。

その後、名誉教授を代表して挨拶に立った三村信男前学長は、「茨城大学で多くの時間を過ごした私たち名誉教授は、本学の最大の理解者、サポーターでありたいと思っています。さまざまな新たな試みの中で、一層の発展を願っており、また応援しています」と述べました。

令和2年度名誉教授称号授与対象者

三村 信男	元学長
尾崎 久記	元理事・副学長
泉岡 明	元副学長
米倉 達広	元副学長
藤縄 明彦	元大学院理工学研究科理学野教授
山村 靖夫	元大学院理工学研究科理学野教授
阿部 修実	元大学院理工学研究科工学野教授
池畑 隆	元大学院理工学研究科工学野教授
今井 洋	元大学院理工学研究科工学野教授
黒澤 馨	元大学院理工学研究科工学野教授
堀辺 忠志	元大学院理工学研究科工学野教授
小林 久	元農学部教授
中川 光弘	元農学部教授



◆ 陸上競技部、3年ぶりに箱根駅伝予選会出場決定

陸上競技部の長距離ブロックの選手たちが、今年の箱根駅伝の予選会に出場することが決まりました。活動自粛や新入生へのアプローチがなかなかできない中、3年ぶりに予選会出場を勝ち取りました。

茨城大学の陸上競技部は2016年度に、10年ぶりに予選会出場を決めました。その翌年度も出場しましたが、一昨年度、昨年度は参加要件にあと一歩及びませんでした。そして2020年の今年、3年ぶりの出場が決まりました。

陸上競技部の長距離ブロックのリーダーを務める理学部3年生の金子暖慈さんは、「正直、今年も厳しいと思っていた」と語りました。

箱根駅伝の予選会は毎年10月に陸上自衛隊立川駐屯地周辺で行われます。出場するには、10000メートルを34分以内、という記録を10人以上のメンバーが達成していなければならない、昨年度は惜しくも9人どまりでした。

今年度は新型コロナウイルス感染症によって大学は入構規制が敷かれ、新入生への勧誘も難しい状況でしたが、その中でも、陸上の経験をもつ新入生たち数名が入部をしました。練習環境が限られる中、近隣の競技場なども借りつつ、メンバー各々時間を見つけて走り込みをしています。金子さんは「3、4年生が精神的にも競技的にも支柱になっていければ」と意気込みを語りました。

10月17日に東京都立川市で行われた予選会では46チーム中42位となり本選には出場できませんでしたが、次への高いモチベーションにつながったようです。



◆ 水戸ヤクルト販売(株)と連携したリカレント教育プログラム開講

本学では今年度より、水戸ヤクルト販売株式会社と連携したリカレント教育プログラムを開講することとなり、9月14日、開講式及びオリエンテーションを水戸キャンパスで行いました。

社会人の学び直しのニーズに応えるため、「茨城大学リカレント教育プログラム」を2019年度にスタート。オープンコース、専門コース、カスタムコースの3コースで構成しており、なかでも企業や団体の要望に応じたプログラムを提供する「カスタムコース」が特徴で、現在4つの企業・自治体との連携プログラムが開講されています。

今年度から始まった「水戸ヤクルト販売株式会社リカレント教育プログラム」は、当初は前学期より開講する予定だったものの、新型コロナウイルス感染症の影響により、後学期からのスタートとなりました。第一期生として迎えたのは自ら希望したという3名の受講生で、「日本語の世界」「微生物と人間社会」「マネジメント入門」といった多様な授業を、現役の大学生とともに受講します。

開講式では、太田寛行学長が受講者ひとりひとりに受講許可書を手渡しました。学長は、「個性的な受講科目を入口に、(茨城大学憲章が掲げる)市民・人間・人材の育成へとつながることを願っている。それは企業にとってはもちろん、大学にとっても大きな力になる」と述べました。

水戸ヤクルト販売株式会社の内藤学社長からは、「企業として社員の再教育に重点を置いてきたが、どうしても業務向上のための学びになってしまっており、仕事から離れて人格を豊かにするリベラルアーツを学ばせたいと思っていた。今回自ら手を挙げてくれた3名からスタートし、少しずつ仲間が増えればと期待している」というメッセージが寄せられました。

受講者を代表して登壇した森浩一郎さんは、「生涯学習が大事だとわかっているけど、業務に追われてなかなか取り組めなかった。こういう機会をありがたく思う。ぜひがんばっていきたい」と意気込みを語りました。

開講式のあとのオリエンテーションでは、本学職員の手作り動画などを用いながら、キャンパスへの入構方法や新型コロナウイルス感染症対策について説明しました。



受講者との集合写真
前列左から3人目が太田学長



太田学長からひとりひとりに
受講許可証が手渡された

◆ 茨城県議会と相互連携・協力に関する包括協定を締結

本学と茨城県議会は、9月24日、相互連携・協力に関する包括協定を締結しました。本学にとって地方議会との包括協定は初めてのことです。また同議会にとっても初めての大学との包括協定となります。今後、政策形成にあたっての調査・研究や議会を活用した学生の学修などの取り組みを推進していきます。

茨城県議会とは、これまでも、授業における県議会議長、副議長によるゲスト講義、キャンパス内での出前委員会の開催、「茨城の魅力を探究し発信する高校生コンテスト」における協働といった取り組みを連携して行ってきました。今回の協定は、そうした活動を踏まえ、組織間の連携・協力をさらに深め、地域の課題に対応し、活力と魅力にあふれる地域づくりや人材の育成を進めることを目的として締結されました。

茨城県議会議事堂で行われた締結式では、茨城県議会から森田悦男議長、伊沢勝徳副議長のほか、各会派の代表議員、また、本学からは太田寛行学長をはじめとする役職員が出席し、森田議長と太田学長がそれぞれ協定書にサインをしました。森田議長は、「大学との連携を通じ、その知的資源を生かし、各議員の専門性を高めていくことが重要ではないかと考え、大学との連携を模索してきた」と、包括協定に至る経緯を紹介。また、太田学長は、「学生たちには、立法機能を通じた地域づくりに触れることで、地域活性化志向を育てほしいし、大学としてもこの連携を通じて、持続的な社会づくり、地域ぐるみのSDGs達成にますます意欲的に取り組んでいきたい」と意義を語りました。

締結式終了後には、本協定締結を記念して、太田学長が「SDGs と新しい茨城：産学官で共創する近未来」と題した講演を行い、議員や茨城県職員、本学の学生・教職員などが聴講しました。



太田学長（右）と茨城県議会の森田議長



太田学長による記念講演

◆ 株式会社 Dinow に茨城大学発ベンチャーの称号を授与

本学は、大学院理工学研究科博士後期課程の高橋健太さんが代表を務める株式会社 Dinow に対し、茨城大学発ベンチャーの称号を授与しました。

株式会社 Dinow は、放射線などによる DNA の損傷評価技術を通じたヘルスケアと安心安全な社会づくりを目指すベンチャー企業で、高橋さんの指導教員である中村麻子教授（放射線生物学）も関わる形で、今年（2020 年）3 月 11 日に設立されました。

9 月 25 日に行われた大学発ベンチャー称号授与式で、太田寛行学長は、同社が掲げる「心をもった科学の発展」という企業理念や「DNA 損傷評価から『健康』と『安心』を実現する」というミッションについて、「大学としてもぜひ推進してほしい」と共感を示した上で、「現役大学院生の高橋さんが起業したというのが嬉しい。研究を事業に活かすというプロセスを、本学の大学院生のキャリアのひとつとして内外に示せた」と述べました。

高橋さんは、「茨城大学発ベンチャーとして広報活動を行うことで、当社の技術への信頼が高まり、県内企業との協力機会増大につながることを期待している」と語っています。

茨城大学発ベンチャーの称号は同社で 8 社目となります。



左から金野満副学長、太田寛行学長、高橋健太さん、佐川泰弘理事・副学長



企業の概要や構想を紹介する高橋さん

◆ 後学期授業初日！水戸キャンパスの1日を追う

9月29日、今年度の後学期・第3クォーターの授業がスタートしました。ほぼ全面遠隔授業だった前学期に対し、後学期は教室が密になることを避ける等の感染症対策が可能な授業について対面授業が再開されました。まずは、全体で3割程度の授業が対面となる見込みです。当日は1年生をはじめ多くの学生たちをキャンパスに迎えることができました。

正門入ってすぐのところに設置したテントでは、学生証をかざしてもらうことで、曜日ごとにどんな時間帯にどのぐらいの数の学生が入構しているかを調べるができるカードリーダーを設置。また、キャンパス内には学生を歓迎する「ようこそ」という看板や新しいキャンパスライフを前向きに作っていこう、という大学のメッセージを込めた「IBADAI new STANDARD」のフラッグが飾られました。

授業は、感染症対策をしっかりと実施した上で開講。教育学部の授業「バスケットボール」では、アリーナをすずらんテープでゾーニングするなど、無用な接触を避ける工夫がなされていました。また、理学部「環境リスクマネジメント論」では、担当の小荒井衛教授が、入室時の手指消毒や、間隔を空けて着席することを呼びかけていました。



また、大学近隣の方々も学生たちを歓迎。大学前で絵画教室などを展開している「みかど商会」の代表・安斎栄さんは往来する学生にマスクを配布し、店舗スペースにも「おかえり茨大生！！」「コロナに負けるな茨大生！！」などメッセージを設置し、学生を迎えました。

今後も、学生、教職員、さらには近隣のコミュニティも支え合いながら、新しいキャンパスライフを作っていきます。